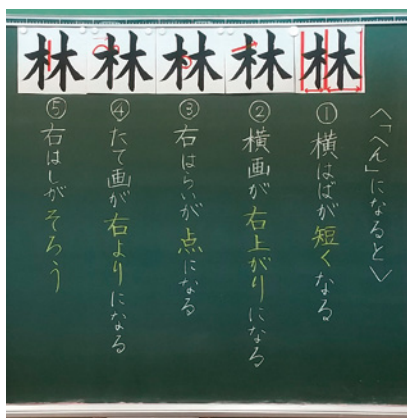




◀板書例全体をこちらから
ご覧いただけます。



慣れない板書ですが、少しずつ書き慣れていきましょう。

④ **落ち着いて書く**
小学生はノートに書く速度が遅いので、教師も焦らず丁寧に書きましょう。長い文になりすぎないように要点を短い文に整理することで、焦らず書くことができます。

・**終筆**……「とめ、はね、はらい」を意識すると丁寧に見えます。

③ **始筆と終筆を意識する**
・**始筆**……「横画」はそのまま書きますが、「縦画」と、「左払い」、「右上払い」は、斜めにチョークの先を置いて書き始めます。毛筆で書いた場合でも、この三種類には少し始筆に押さえがあるからです。

机に向かって書くときと違い、黒板のように立った姿勢で横から書写するのは、確かに難しいことですね。板書の基本についていくつか説明します。

Q 板書の文字に自信がありません。上達するためには、どんなことに気をつければよいのでしょうか。



回答 藤井浩治
(元広島県尾道市立御調西小学校校長)



① **チョークはつまむように持つ**
チョークは、指揮者のタクトのようにつまんで持ちます。軸を立てて書くとき黒板へ接する部分が広くなり摩擦が大きくはじかれてしまうからです。タクトのようにつまむことで黒板に対して軸を倒し、接する部分を小さくして書くのです。また、折れやすいので、先に近い部分を持つようにします。

Q 先生によって教え方が違うと、子どもがとまどわないでしょうか。指導のしかたは、どこまでそろえるべきなのでしょう。



同じ単元でも教師によって授業の「ねらい」は決まってはいけません。

「林」という課題で「左右の組み立て方」を学習する場合として説明します。この授業の「ねらい」は「左右の部分からなる漢字を組み立てる方法（原理・原則）を知り、整えて書くことができるようにすることです。決して「林」という漢字のみを整えて書く方法を学習しているわけではありません。

「きへん」と「木」を比べると、「きへん」は①横幅が短くなる、②横画が右上がりになる、③右払いが点に変化する（終筆を変化させる）、④縦画が横画に中心で交わっていない（右が短い）、⑤へんの右端をそろえるなど、五つの工夫が見えてきます。これは、「林」を書くときだけでなく、「きへん」、さらに言えば、左右の部分を組み立てるときの「全てのへん」の原理・原則

教えて！先輩

未来の先生からの疑問をずばっと解決

第1回 四国大学文学部書道文化学科

太田剛先生のもとで学ぶみなさん



書写教育について学ぶ未来の先生たちの疑問に、藤井浩治先生がお答えする本連載。初回は徳島県吉野川のほとり、四国大学をたずねました。書道文化を総合的に探究できる書道文化学科には、教員や書塾の指導者を目指す学生が多数在籍しています。学ぶ学生からの疑問に、二回にわたってお答えします。



写真は、2年生の書写教育概論の授業の様子。「自分が書けることと教えることはまったく別のこと。子どもの意欲を喚起する楽しい指導方法を、自分なりに考えてほしい」という太田先生。

② **文字の大きさと配列に気をつける**
書写の学習で学んだ「文字の大きさと配列」を活用します。漢字を少し大きく、平仮名を少し小さく書きます。また、行の中心に気をつけて書きます。「横書き」の場合は、加えて文字の下をそろえることを意識してみましょう。

則でもあります。授業はこの「ねらい」がぶれないように作っていきます。

いっぽう、書写の学習には「単元の中心となる学習内容（ねらい）」だけでなく「既習事項の学習内容（復習）」があります。この二つをうまく区別して指導することが大切です。「林」を指導する場合、まず中心の学習である「へんの五つの工夫」を学びます。次に「右払いの筆使い」など子どもたちがつまずきやすい「既習事項」を活用（復習）して、自己課題を解決すること、さらに「林」を整えていきます。

それぞれの教師がどのように授業をコーディネートしていくのかは違って当然ですが、「中心となる学習」を間違えてしまったり、既習事項を強調しすぎたりしないように教師どうしでそろえていきましょう。

次号は子どものやる気アップのコツと、水書板の活用についてお答えします。

太田 剛

四国大学文学部書道文化学科教授。朝鮮半島書道史、近世近代日本書道史、地域社会と学校との連携による書道教育について研究している。

藤井浩治

元広島県尾道市立御調西小学校校長。光村図書小学校・中学校『書写』教科書編集委員。